

2014年度 第5回 全体研究会

■報告題目：近代仏教と大乘非仏説論

■報告者：林 淳（愛知学院大学文学部教授）

■コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARC センター長）

■開催日時：2014年11月27日（月） 17:00～19:00

■開催場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室

■参加者：49人

【報告のポイント】

林淳氏は、日本の近代仏教の形成において西洋からもたらされた大乘非仏説の衝撃が果たした役割と、その大乘非仏説という問題が、日清・日露戦争の時期を境として次第に克服されていく過程を明らかにした。またこれに関連して、宗門系大学の設立の歴史的意義についても論じ、日本仏教の近代化に関する新たな知見を提示した。

【報告の概要】

大乘仏教は仏陀が直接説いた教えではなく、仏説とは言えない。このいわゆる大乘非仏説は、インドや中国において既に主張されており、日本でも近世の富永仲基などが論じていた。しかし林氏の今回の報告で強調されたのは、近代における大乘非仏説の、前近代におけるそれとの質的な相違である。近代における大乘非仏説のポイントは、西洋で誕生した近代文明・学術の一種である近代仏教学の成果としてそれが普及したという点にある。

西洋の近代仏教学においては、文明化された西洋の仏教学者こそが「真の仏教」を理解・把握できるという信念が表されていた。アジアの人々が実際に信仰してきた仏教は正当に評価されず、テキストを通して理解される理想的な人間として仏陀が描かれた。パーリ経典とサンスクリット経典が重視され、漢訳経典は軽視あるいは蔑視された。西洋に留学した日本の仏教学者もまた、この近代仏教学に学び、影響を受け、やがては文明化された日本の仏教学者こそが

「真の仏教」を理解でき、その仏教を非文明的なアジアに教示していかななくてはならない、という使命感を抱くようになっていった。

真宗大谷派の南条文雄や笠原研寿は、英国に留学し、マックス・ミュラーに仏教学を習った。ミュラーは、仏陀の教えとは異なると彼には思われた阿弥陀経の内容を否定し、南条らに対して元来の仏教に戻るべきと主張した。こうしたミュラーの大乗非仏説は、南条や宣教師ゴードンらによって日本の仏教系知識人の間で広まっていき、しばしば日本仏教批判のために援用された。

南条は、しかしミュラーは「文学の師」ではあっても「宗教の師」ではないとして、説教師としてはミュラーの説を一蹴した。同様に、日本における国別仏教史の創始者である村上専精もまた、歴史的な問題としては大乗非仏説を肯定しながらも、信仰の問題としては大乗仏説を採った。そして村上は、仏教のルーツであるインド仏教と、仏教の最終的な発展形態である「開発仏教」としての日本仏教をトータルに研究できる日本の仏教学者こそが、世界的に優位な立場にあると誇示するに至った。

日本の仏教（学）者による自国の仏教に対する自信は、日清・日露戦争という転換期を経て、決定的に強まっていく。この時期には、僧侶による従軍や超宗派的な戦死者慰霊などを通して、仏教に対する評価が高まった。また国家の植民地政策と並走したアジア地域における海外布教の展開に加え、社会教育的な面で日本の民衆に対する仏教の教化力に対しても期待が高まり、総じて日本仏教が社会的に浮上していった。

こうした動向の中で、大学令の公布を経て大正期以降、宗門系大学が次々と設立されていった。この宗門系大学を設立するには、50万円（現在の約25億円）の供託金が必要であり、したがって浄土真宗や曹洞宗など、巨大教団だけがこれを設立することが可能であった。「仏教学」はそれらの宗門系大学において制度化されていき、江戸時代の宗乗の伝統を継ぐ宗学（真宗学、禅学など）と、インド・中国・日本の国別仏教史という、レベルの異なる仏教の学が、一つの大学の中で共存するという状況がもたらされた。

最後に結論として林氏は、西洋の大乗非仏説の衝撃から日本における大乗仏教肯定説への展開過程を解明した本報告をふまえ、日本の近代化は、「西洋と自己との関係」という初期段階から、「アジアと自己との関係」さらには「日本と自己との関係」というように次第に多重化

していき、特にアジアの近隣諸国との関係が重視されるようになった段階において、アジアの共通遺産である仏教が、民衆教化のためにも必要になったことを指摘した。

【議論の概要】

桂氏は、インド仏教研究者としての自身の経験から、今回の報告の対象である戦前に比べて、戦後の日本人の仏教学者らの西洋に対するコンプレックスは弱まっていること、また何が仏説かという論争は大乗仏教の成立時からあったが、そこで示された、「法性」が説かれている限りそれは仏説といった論理などは、現代日本の宗派仏教という、それぞれが仏説であるはずの仏教の当事者にとっても、学ぶところがあるだろうとコメントした。

会場からは、大乗非仏説に対して「真の仏教」としての「近代仏教」が提示されたのかという質問や、西洋と日本の関係だけでなく、アジア間での仏教に基づく多様な交流も存在していたという指摘、大乗非仏説論は広く社会的にどのように受容されたのかという問いなどが出された。林氏はこれらに応えて、「近代仏教」というものを実体的に定義することには躊躇があり、西洋のインパクトに対する非西洋からの多様な反応としての「近代仏教」について考察したいということ、また西洋との関係で生まれた「成功した近代仏教」だけでなく、「失敗」したそれも再評価していくべきこと、さらに大乗非仏説に衝撃を受けたのは専門的な知識人のみであり、その前提となる社会については語り難いと述べた。

